

# 新潟市内での戦争体験 小林 佳子

## 1 はじめに

私は1930年（昭和5年生まれ）。太平洋戦争へ突入した真珠湾攻撃（注1）の1941年（昭和16年）12月8日午前6時のラジオ放送「帝国陸海軍は本8日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」までは、おぼろげな記憶しかない。

当時、私は11歳の小学校5年生。この放送は寝床で聞いた。父は警察官、母は教師という家庭だったので、この戦争は予測していただくように、家では時局（注2）に対する会話はあまりなかったようだ。3歳上の兄と2歳下の妹と3人兄弟だが戦争に対する認識は薄かったように思われる。だから戦争については、日本史の中の昭和初期の大恐慌（注3）からファシズム（注4）の台頭、太平洋戦争への道と、歴史書をひも解いて認識を深めたと言っている。

### （注1）真珠湾攻撃

1941年（昭和16）12月8日、日本海軍の機動部隊がハワイ真珠湾に集結していたアメリカ太平洋艦隊を奇襲攻撃した事件。これによって太平洋戦争が始まりました。

### （注2）時局

時世のありさま。そのときの世の中の状態。特に、そのときの政治経済などの状況。

### （注3）大恐慌

1929年（昭和4）10月24日（暗黒の木曜日）のニューヨーク株式市場大暴落に端を発し33年まで続いて、ソ連を除く世界全体を巻き込んだ経済恐慌。

### （注4）ファシズム

第一次大戦後に現れた全体主義的・排外的政治理念、またその政治体制。自由主義を否定し一党独裁による専制主義・国粋主義をとり、指導者に対する絶対の服従と反対者に対する過酷な弾圧、対外的には反共を掲げ侵略政策をとることを特色とした。イタリアのファシスト党に始まる。

## 2 小学生の頃

私は新潟小学校で、当時普通は男女別クラスだったが、私の学年だけは人数の関係で1クラスだけ男女の組だった。小学校生活の記憶としては、四大節きおく（注5）（新年元旦・紀元節しだいせつ『2月11日の神武天皇即位の日』・天長節きげんせつ『4月29日の昭和天皇誕生の日』・明治節てんちょうせつ『11月3日の明治天皇誕生の日＝現在 文化の日』）の祝日には全校生徒が運動場に集まり式典が行なわれた。御真影ごしんえい（天皇の写真）を奉安殿ほうあんてん（注6）（御真影はここに飾られていた）から校長先生がうやうや恭しく運ばれ、一斉に最敬礼さいけいれいをした後、君が代せいしょう斉唱くんじ、訓示があった。どの位の時間だったのか、貧血ひんけつでバタンと倒れる生徒がいた。教科書には修身しゅうしん（注7）があり、二ノ宮金次郎にのみやきんじろうとか、広瀬中佐ひろせちゅうさなどが載っていた。紀元2600年＝神武天皇即位から2600年（1940年『昭和15年』）の式典の記憶は薄いが、運動会で「紀元は2600年、ああ1億の・・・」の歌を歌いながら、日の丸の小旗を持って歌に合わせてダ

（注5）四大節

旧制度の四つの祭日。1927年（昭和2）制定。四方拝（1月1日）・紀元節（2月11日）・天長節（4月29日）・明治節（11月3日）の総称。

（注6）奉安殿

第二次大戦前・戦中、学校で御真影や教育勅語などを保管するために設けた特別な建物。

（注7）修身

第二次大戦前の小・中学校などの教科の一。教育勅語をよりどころとして、国民道徳の実践指導を目的としたもの。

センスをしたことを鮮明に覚えている。

てきちかんらく せんしょうきねん なた  
敵地陥落の戦勝記念と称して、昼は旗  
ぎょうれつ ちょうちんぎょうれつ  
行列、夜は提灯行列があった。

小学校6年生になって、女学校を受験する生徒は、放課後にダンスの練習と口頭試験の予習があった。当時は男女別学で女子は女学校、男子は中学校だった。入学試験にはペーパーテストはなく、面接による口頭試験と飛び箱とダンスの体育。男子校には鉄棒が重要な受験科目だった。

### 3 女学生の頃

1943年（昭和18年）、県立新潟高等女学校  
に入学。女学校の制服は、へちま衿で最高学  
年の5年生が縫製（注8）してくれた。勉強は、  
1年生の時は、普通に勉強したようだが、2年  
生になって英語教科は希望者のみで、英語組と  
言って6学級のうち1学級のみとなった。勤労  
奉仕（注9）と称して白根の農家へ桃の袋かぶせ、  
新潟港へ塩の荷揚げ作業に行った。

（注8）縫製  
縫って洋服などをつくること。

（注9）勤労奉仕  
公共の目的のために、無償で労力を提供すること。特に、第二次大戦中に学生などに課された無償の労働。

#### 4 <sup>ていしんたい</sup>女子挺身隊 (注 10)

日本の労働力が<sup>ひっぱく</sup>逼迫 (注 11) する中で、強制的に<sup>はいちが</sup>職場を<sup>こくみんそうどういんたいせい</sup>配置換えする国民総動員体制の補助として行なわれた。

<sup>そうりょくせん</sup>国家総力戦となった第二次世界大戦の様相から、<sup>ようそう</sup>アメリカ・イギリスの連合国は日本に<sup>さき</sup>先んじて<sup>すで</sup>既に<sup>ぐんじゅ</sup>女性を<sup>どういん</sup>軍需工場に動員していた。

日本も<sup>せんきょく</sup>戦局の<sup>ちょうへい</sup>悪化で徴兵 (注 12) が拡大して男性労働力が不足すると女性の労働力を無視できなくなった。

1943 年(昭和 18 年)9 月の<sup>きんろうどういん</sup>「女子勤労働員ノ<sup>そくしん</sup>促進ニ関スル件」では、航空工場・政府作業<sup>しゅうぎょう</sup>所・男子が就くべきでないとする分野 (たとえば、保母『現在の保育士』や看護婦『現在の看護師』) など女性労働者の<sup>しゅうぎょう</sup>就業拡大を図るものとされた。女性を工場で長時間労働させるために<sup>たくじしょ</sup>託児所 (注 13) も増やされた。

1943 年(昭和 18 年)、<sup>ていしんたい</sup>上級生は女子挺身隊として、<sup>くりあ</sup>繰上げ<sup>かりそつぎょう</sup>仮卒業し、市内の鉄工所、役

(注 10) 女子挺身隊

太平洋戦争下の女子勤労働員組織。満二五歳未満の女子を居住地・職域で組織。1943 年(昭和 18)の閣議決定で実施、翌年の女子挺身勤労令により 1 年間の勤労奉仕を義務づけました。

(注 11) 逼迫

行き詰まって、ゆとりのない状態になること。「生活が一する」「事態が一する」

(注 12) 徴兵

国家が国民を強制的に兵役につかせること。

(注 13) 託児所

乳幼児を預かり、その保育・指導を行う施設。→ 保育所

所、軍施設へ出勤した。

1944年(昭和19年)5月から学校に「<sup>りくぐん</sup>陸軍  
<sup>ひふくほんしょう</sup>被服本廠新潟出張所第一学校工場」が設置さ  
れ、生徒はここに<sup>どういん</sup>動員された。同年7月から高  
学年の生徒は男女とも県外の工場へ<sup>どういん</sup>動員され  
る計画だったが、平松校長、村上視学官の努力  
で、そのまま学校で働くこととなったことは、  
後日上級生から聞かされた。

<sup>こうどう</sup>学校の講堂、体操場、教室が作業場となった。

ミシンは、学校備品では足りず、在校生や卒  
業生の家庭から借り受けた。ミシン運びも生徒  
が行なった。

上級生は<sup>じゅばん</sup>襦袢(シャツ)や、<sup>こした</sup>袴下(ズボン  
下)をつくり、3年生以下は、勉強の合間にボ  
タン付けをした。

ノルマがあったのだろうか、早い人は<sup>ほ</sup>褒めら  
れていた。

1945年(昭和20年)に入ってからだと思  
うが、私のクラスは、上級生が動力ミシンで<sup>ふち</sup>淵  
をか<sup>きゃはん</sup>がった脚袷(ゲートル)<sup>ひも</sup>(注14)の紐付け作

(注14) ゲートル

ズボンの裾を押さえて、足首から膝まで覆うもの。多く軍服用。一枚の厚布や皮革を脇でとめるもの、小幅の布を巻きつけるもの(巻きゲートル)などがある。日本では後者をいうことが多い。

業だった。

ゆいいつうれ しょくりょうじじょう  
唯一嬉しかったことは、食糧事情が悪く、

各家庭で子どもの弁当に苦労していた中、軍か

はいきゅう こうどう  
ら配給（注15）があり、講堂で全員で昼食を食  
べた。

い しっそ  
ご飯とおかずは炒り豆という質素なものだっ  
た。

私の場合は、父が弁当を工夫して作ってくれ  
たが、女の子に恥ずかしい思いをさせたくない  
と煮た大根を底に敷き、その上にご飯をのせた  
ものだった。

くうしゅう  
その頃、全国各地が空襲（注16）を受け、新  
あぶ ぼうくう ぼうかくんれん  
潟も危ないと、学校でも防空・防火訓練が行な  
われた。

けいかいけいほう くうしゅうけいほう  
体験はないが、警戒警報・空襲警報のサイ  
レンが鳴るとミシンを持って防空壕（注17）へ  
ひなん  
避難した。

まごまごしていると、軍人に「人間の代わり  
はあるが、ミシンの代わりはない！」と言われ  
たとか……。戦争の恐ろしさだ。

（注15）配給

品物などを割り当てて銘々に与えること。

（注16）空襲

航空機から地上を爆撃したり銃撃したりすること。

（注17）防空壕

空襲から身を守るため、地面を掘って作る待避所。

## 5 地域・家庭では

町内は隣組となりぐみ(注18)組織が徹底し、夜に隣組となりぐみの会合かいごうが開かれたり、防空演習ぼうくうえんしゅうは町内会単位で時々行なわれた。バケツリレー、梯子はしごに登るなど。服装は、男性はズボンにゲートル。女性はおもんぺほんぺ(和式ズボン)に防空頭巾ぼうくうずきん(注19)を被かぶった。上着なふだには名札なふだ(住所・氏名・年齢・血液型を記載)を縫い付けておいた。私のような子どもは伝令でんれいの役をさせられた記憶きおくがある。

各家の前には、防火用水ぼうかようすい(ドラム缶ほどの大きさ)のセメントで出来たものに消火用水しょうかようすいを入れてあるもの)があった。燈火管制とうかかんせい(注20)とあって、電灯を黒い布おおで覆い、警戒警報けいかいけいほうと空襲警報くうしゅうけいほうのサイレンを合図あいずに電灯を消した。窓を黒い幕まくとか新聞紙おおで覆っていた様ように思おもう。

日時きおくに記憶はないが、アメリカ機が日本軍の高射砲こうしゃほう(注21)で落とされたことがあった。今の新潟大学病院あたりにあった招魂社しょうこんしゃ(注22)の防空壕ぼうくうごうに逃げていたが、アメリカ機が火達磨ひだるま

### (注18) 隣組

1940年(昭和15)に制度化された国民統制のための地域住民組織。五〜一〇軒を一単位として部落会・町内会の下に設けられ、配給・供出・動員など行政機構の最末端組織としての役割を果たしました。

### (注19) 防空頭巾

戦時中、空襲などの際に飛来物から頭を守るためにかぶった綿入れの頭巾。

### (注20) 燈火管制

夜間の空襲に備えて、灯火を消したりおおい隠したりすること。

### (注21) 高射砲

航空機を撃墜するための中小口径砲。旧陸軍の呼称で、海軍では高角砲と称する。

### (注22) 招魂社

明治維新前後およびそれ以後、国家のために殉難した者の靈魂を奉祀した各地の神社。東京招魂社は1879年(明治12)靖国神社と改称。地方の招魂社は1939年(昭和14)護国神社と改称。

(注23)になって落ちていくのを見ていた。後日、

今の県民会館のあたりにその残骸(注24)を、

先生の引率で見に行った。

出征(注25)兵士を送るセレモニーが町内で  
しばしばあった。その兵士のために弾があたら

ないようにと願いを込めて千人針(注26)で

腹巻を作った。白い晒布に赤い糸で一つずつ

だったが、寅年生まれの人は自分の年の数だけ  
縫えるので大忙しだった。

## 6 疎開(注27)ということ

日本においては、第二次世界大戦末期に、

攻撃目標になりやすい都市に住む学童、老

人、女性又は直接攻撃目標となるような

産業を分散させ、田舎に避難させるという

政策をさす言葉として一般化した。

学童疎開(注28)として都会の学童が親元を

離れて田舎に疎開したが、疎開する子どもたち、

させる親たち、受け入れる田舎の人たち。みんな

な、それぞれにつらい思いや暮らしを強いられ

(注23) 火達磨  
全体に火がついて燃えあがること。

(注24) 残骸  
もとの形をとどめないほど、壊れたり破壊されたりして残っている物。

(注25) 出征  
戦争に行くこと。戦地に行くこと。

(注26) 千人針  
一枚の布に千人の女性が赤糸で一針ずつ刺して縫い玉をつくり、武運と無事を祈って出征兵士に贈ったもの。日清・日露戦争の頃に始まったという。千人結び。

(注27) 疎開  
災害や空襲に備えて、都会の人や物資・工場などを他の地に移すこと。

(注28) 学童疎開  
第二次大戦末期の1944年(昭和19)7月から、大都市の国民学校初等科児童を農山村や地方都市へ集団移動させたこと。



たことは、想像を絶する。

我が家へも東京の親戚から母親が3人の  
子どもを連れて疎開してきた。大きくもない家  
なのに、また食糧事情も悪いことも手伝っ  
て、長くは続かず、間もなく他へ移って行った。

戦局が厳しくなってきた祖母だけは五泉  
へ疎開して行った。

7 機銃掃射 (注29)

1945年(昭和45年)8月10日の昼。

アメリカの戦闘機による空襲。戦闘機から  
機関銃で「バリバリバリ」と銃撃。私は恐ろ  
しさに押入れの中に逃げ込み布団を被って  
いた。

防空壕は空き地を利用して作られていたが、  
逃げるヒマなどない。各家庭では、畳をはぐり、  
床をはぐり、小規模な防空壕を作っていた。

動くものは何でも撃たれるから洗濯物を外  
へ干すなど言われていた。

(注29) 機銃掃射

機関銃で敵をなぎはらうように  
射撃すること。

げんぱくそかい  
8 原爆疎開

当時の記録から。1945年（昭和20年）、

げんぱくとうか さいしゅうこうほち  
アメリカの原爆投下の最終候補地として、

あ  
広島、長崎の他に、小倉や新潟の名前が挙がっ

こうげきもくひょう はず  
ていた。新潟市が攻撃目標から外されたの

げんぱくとうか  
は、8月6日、8月9日の原爆投下直前である。

すで  
新潟県では、同年7月20日に、既に長岡市

げんぱくもぎばくだん とうか  
に最初の「原爆模擬爆弾」（注30）が投下され、

同年8月1日には、B29による大空襲で約

1,400人もの死者を出していた。長岡空襲で燃

もよう  
え盛る模様は、新潟市からも赤い空が見えたほ  
どだった。

そのような状況下で、当時の畠田昌福新潟県

けいほうか はげん  
知事は、ただちに警防課職員を広島に派遣し、

しゅうしゅう ないむしょうじょうほう  
その職員が収集した内務省情報から、広

しんがたばくだん とうか  
島、長崎の後に新潟にも「新型爆弾」が投下さ

はあく いた  
れる可能性があるとして把握するに至った。

かんぶ きんきゅうかいぎ  
同年8月10日には、県幹部の緊急会議が

てっぺい そかい きんきゅう じっし  
開かれ、「徹底シタル疎開を緊急に実施」する

ことが決定した。新潟市でも、これを受けて11

（注30）原爆模擬爆弾

この爆弾がオレンジ色に塗装され、ずんぐりと丸い形をしていたことからパンプキン（かぼちゃ）と呼ばれました。

パンプキン1発に詰められた火薬量は、通常爆弾で最大の1トン爆弾の4倍半あり、強力な爆弾でした。

アメリカ軍は、この原爆を模した大型爆弾を用いて投下訓練をしていました。

パンプキンの投下目標は、原爆の投下目標都市を避け、その周辺の都市、しかも焼夷弾などによる通常の攻撃目標になっていない都市の中から選定する必要がありました。

7月20日、2機のB29が長岡に向けて出撃。長岡市の津上安宅製作所に対してレーダーでパンプキンを投下。古志郡上組村左近（現長岡市）に落ち、4人が死亡。5人が重軽傷を負いました。また、150m離れた農家がほぼ全壊しました。

新潟歴史双書2

「戦場としての新潟」より抜粋

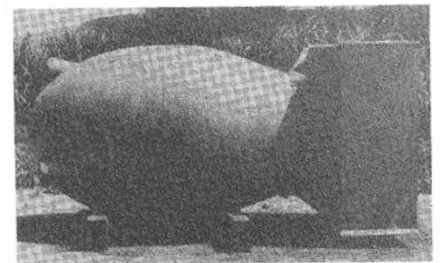


図32 模擬原子爆弾パンプキン 奥住喜重・工藤洋三訳『米軍資料 原爆投下の経緯』から

日の午後 緊急会議が開かれ、疎開が実施された。新潟市は人っ子一人居らず空になった。

新潟に残った人がいたとは後日聞いた。

我が家は、同年8月12日だったと思うが、

消防署の疎開と一緒に（父が消防署長だったのか）一家揃って消防自動車に乗せられ、亀田小学校へ疎開した。小学校の近くの家の二階が仮住まいだった。

同年8月15日の敗戦の日の天皇のラジオ放送は聞き取れなかった。アメリカ軍機から、

日本降服（注31）のビラが撒かれたが、それを拾

うことすら禁じられていた当時、父の話から

敗戦を知った。そして何日後だったか、新潟に

帰ってきた。暑い暑い日だったと記憶している。

学校が始まることは、上級生から知らされ登校した。同年8月20日頃だったと思う。

登校して主任の先生から泣きながら敗戦の

話があった。必ず、日本は立ち直り復讐するという内容だった。

授業は始まった。今までの教科書は使用で

（注31）降伏  
戦いに負けて、敵に服従すること。

きなくなり、英語教育が始まった。敵国語として教科から外されていたものの復活で、英語がにがてくろうきょうざいこいすみやくも  
苦手な私は苦労した。教材は、小泉八雲のもので、原文そのものが難しいのに参った。

社会科の先生の民主主義についての学習が始まったが、なかなか理解できなかった。また、学習方法について生徒による討論会があったが、民主主義の理解のないまま空回りしていたように記憶している。

学制が変わり、私たちの学年が高校第1回生となった。殆どが女学校5年で卒業し、1クラスくらいの生徒が高校生として残った。

私は母が教師になることを勧めたが、高校の数学教師を夢見ていたことと、経済的に苦しい家庭の長女としての自覚が就職の道を選んだ。

## 9 男子青少年たち

小学校6年生の時、私のクラスの男子生徒が、少年隊を志願して行った。健康で成績優秀の

生徒だった。今は亡き人である。

## 10 <sup>よかれん</sup>予科練 (注32)

<sup>こうくうきとうじょういん</sup> <sup>ようせい</sup>  
旧日本海軍における航空機搭乗員の養成  
<sup>よかれんしゅうせい</sup> <sup>りやくしょう</sup>  
制度。海軍飛行予科練習生の略称。航空兵  
<sup>かくじゅう</sup> <sup>そう</sup>  
力の拡充のための1930年(昭和5年)に創  
<sup>せつ</sup>  
設。1941年(昭和16年)12月太平洋戦争  
<sup>とうじょういん</sup>  
が始まると、航空機搭乗員の大量育成のため、  
<sup>よかれん</sup>  
予科練入隊者は大幅に増員された。甲飛(甲種  
飛行予科練習生)1期生の採用人数は、200名  
~1,000名程度であったが、12期生以降は各  
期3万人以上の大量採用となった。

## 11 兄のこと

<sup>よかれん</sup>  
中学校3年を終えて三保海軍航空隊(予科練)  
<sup>いっしょく</sup>  
へ入隊して行った。学校教育の中は戦争一色。  
男子は戦争に行くべしとの状況の中、少年ら  
<sup>じゅんすい</sup> <sup>ほうこく</sup> <sup>せいしん</sup>  
しい純粋な報国(注33)精神だったのだろう。  
<sup>けっしん</sup>  
長男である兄は、一大決心をして親に

<sup>けっばんじょう</sup> <sup>しがん</sup>  
血判状(注34)まで書いて志願を認めてもらっ

### (注32) 予科練

旧海軍の飛行機搭乗員養成制度。初め横須賀航空隊内に設置されたが、のち茨城県土浦に独立。小学校高等科卒(乙種)、中学四年修了者(甲種)を主とする志願制で、訓練を経て飛行科下士官となりました。

### (注33) 報国

国恩にむくいるために働くこと。国に尽くすこと。

### (注34) 血判状

血判を押した書状。起請文・願文・契状など。

ていた。そして合格を目指し視力に自信がなかったのか毎朝早起きをして近くの海を見に行っていた。

兄は出発の日、食糧難しょくりょうなんの中、両親の心づくしの、好物こうぶつである「おはぎ」を腹いっぱい食べていった。

両親と祖母は見送りから帰ってきて、長火鉢ながひばちの前で夜遅くまで泣いていたのが忘れられない。

戦後兄は帰ってきたが、中学校ふくがくへは復学  
(注35)できず、夜間中学校(現明訓高校)へ  
通い新潟大学へ進学した。そして小・中学校の  
教師となった。

兄の二年・三年上の男子若者は多数、特攻隊とっこうたい  
(注36)で戦死せんししている。

## 12 徴兵令ちょうへいれい (注37)

徴兵検査ちょうへい 満20歳(1943年から満19  
歳)になった男子は、徴兵令ちょうへいれい(後に兵役法)  
により、徴兵検査ちょうへいを受ける義務があった。検

(注35) 復学

学業を中断していた者が復帰すること。休学していた者などが、学校に戻ることに。

(注36) 特攻隊

第二次大戦中、爆弾を積んだ飛行機などで敵艦に体当たり攻撃を行なった部隊。

(注37) 徴兵令

国家が国民を強制的に兵役につかせること。

査に学力検査はなく、身長 152 センチ以上で身体が強健、視力がおおむね良好ならば甲種合格とされた。

### 13 夫のこと

夫は、兄と同じ 1927 年（昭和 2 年）生まれ。

中学校 3 年から名古屋の軍需工場へ行った。

学校では志願兵募集があり、純粋な少年たちは、次々と志願していった。

夫も学校へ志願を申し出た。その時夫の母は、「学校だけは卒業させてくれ。卒業したら必ず志願をさせるから」と校長先生にお願いに行ったそうである。

後にそれを聞き、そんな時代の中で母親とし

ての思いを貫いた姑を尊敬した。

夫はその後、貯水池の警備をし、8 月 20 日に帰還したとのこと。

帰還後は親戚の農家への手伝いに行った。

百姓がやれるならどんな仕事もやれると思っ

たほど過酷な労働だったそうである。翌年の 1

しゅうしょく  
月に就職した。

## 14 敗戦後の日本

はいせん こんきゅう  
敗戦、戦後の困窮はしっかりと味わった。

とうせい はいきゅう しょくりょう  
物資のほとんどは統制で配給制度。食糧

じじょう しゃく はいきゅう  
事情は悪く、1日2合1勺の配給米で、  
毎食すいとん入りのおじやだった。

べいこく  
米穀通帳（注38）があった。

タバコは販売店で子どもまで行列を作って並  
んだ。食料と交換するために・・・。

しんちゅう  
アメリカ軍が進駐してきて、女学校へは  
集団登校をした。

しんちゅう せっしゅう  
今の新津記念館は、進駐軍（注39）に接収  
（注40）され宿舎となった。

私は、登校路で門に立っている番兵に  
「おはよう」と声をかけられたが、返事も出来  
ず恐ろしかった。

えいしょどおり  
営所通りをアメリカ兵と手を組んで歩く  
女性（パンパンガールと呼ばれていた）を日中、  
多数見かけた。

（注38）米穀通帳

第二次大戦中から戦後にかけて、政府が米穀統制のために各世帯に配った通帳。

（注39）進駐軍

第二次大戦後、日本に進駐した連合国の軍隊。〔講和条約発効後は「駐留軍」と称した〕

（注40）接収

国家権力などが、強制的に国民の所有物を取り上げること。



国の方針が一般の女性を守るためと称して  
売春を認めていた。「売春禁止法」が出来たのは  
昭和30年代。この時もまだまだ売春を肯定す  
る国会議員が大勢いたことを覚えている。

せんそうほうき みんしゅしゅぎ じんけんそんちょう だんじょ  
戦争放棄、民主主義、人権尊重、男女  
びょうどう しんけんほう びんぼう  
平等の新憲法が公布され、我が青春は貧乏な  
がら自由に満ちていた。何かしらの開放感があ  
った。戦争と言う大きな犠牲の上で得た平和と  
自由を大切にしていきたい。あと僅かな人生を  
これを守るために生きていきたい。